

## 巻頭言

長田 俊樹

言語記述研究会は総合地球環境学研究所（略称：地球研）でおこなわれた『環境変化とインダス文明』というプロジェクト（略称：インダスプロジェクト）の一環として立ち上げ、インダスプロジェクトは長田がプロジェクトリーダーとして立ち上げたものだった。2003年10月に、地球研に赴任した際は、プロジェクトの名称は『言語学的手法による古代文明の生活環境復元とその総合的検証』という言語学を前面に出したものだったが、評価委員会からの要請もあって、『環境変化とインダス文明』として、環境調査を前面に押し出したものとなった。しかし、プロジェクトのタイトルが変わったからといって、言語学の研究をしてはならないということにはならない。そこで、2007年4月から、大西正幸さんが上級プロジェクト研究員として地球研に赴任したのを機に、この言語記述研究会を立ち上げ、2009年3月からはその研究会の雑誌として、『地球研言語記述論集』を発刊したのが、言語記述論集をはじめた経緯である。

インダスプロジェクトは2012年3月に終わり、今度は大西正幸さんが地球研で新たなプロジェクト「アジア・太平洋における生物文化多様性の探究」を立ち上げたため、『地球研言語記述論集』はそのまま地球研から発刊を続けたが、予算的に紙媒体で出版するのが難しいため、電子媒体として出版し、現在7号に至る。しかし、残念ながら、2015年2月の評価委員会で大西さんのプロジェクトは本研究にあがることができなかつたため、地球研を冠した言語記述論集は7号で終わることになった。

言語記述研究会には京都大学の言語学研究室から多くの学生、院生が参加してくださった。今後の運営を一手に引き受けてくださった千田俊太郎先生は、言語記述研が立ち上がった頃からのメンバーであり、論集の第1号に、「ドム語の多義一知覚動詞を中心に」を寄せている。一時、熊本大学に赴任しておられたが、2013年10月に京都大学准教授と赴任されて以後、研究会の運営や論集の編集は千田先生にゆだねられてきたので、地球研という冠が取れたからといって、実質的な運営や論集の編集が変わるわけではない。あんまり形式的な巻頭言とするのは良しとしないので、一言千田先生との思い出を書いておきたい。

1995年6月23日、2008年に88才で亡くなった大野晋さんを国際日本文化研究センターにお招きして、「日本語＝タミル語起源説を検証する」と題して、シンポジウムを開催した。大野晋と聞いても、今の若い人にはピンとこないかもしれない。当時、岩波新書『新版日本語の起源』が出版されたばかりで、日本語はタミル語と起源を同じくするという仮説を提唱しておられた。そのシンポジウムはドラヴィダ語を専門とする若手（熊本大学の児玉先生や京都大学の家本先生など）が大野晋に挑むとして朝日新聞にも取り上げられた。そんなシンポジウムに、若き日の、まだ学部生だった千田先生が参加したのだという。そのシンポジウムの司会をやっ

ていたの、庄垣内さんや大阪外大の橋本さんがいらっしやったのはわかったが、若き日の千田先生の勇姿はまったく記憶に残っていない。ただ、あのシンポジウムはなかなか面白い体験だった。後で、庄垣内さんにも「あれは面白かった」とほめられた。そんな会に若き日の千田先生が参加していたのは本当に貴重な経験だったのではないかと思う。

こちらが千田先生を認識するようになったのはその後ずいぶん経ってからだ。1997年から3年間、京大に非常勤講師として教えに行ったが、その講義には千田先生は受講されなかった。また、宮岡先生が主催した特定研究の国際会議などにも参加したが、そのときにも千田先生とお会いしたはずだ。しかし、あまりにも多くの人々が参加していたので、千田先生のごことはまったく記憶にない。ただ、大西さんに頼まれて、ブーゲンビル島から来たテレゼさんを自宅にお泊めしたことがあったが、そのとき、昼間の案内人が千田先生だったように記憶する。しかし、そのときも、会話を交わしたわけではなかった。結局、言葉を交わしたのは、2003年、オーストラリアのメルボルンでお会いしたときだった。長田は一家で、夏休みを利用して、在外研究でお世話になった、ニコラス・エヴァンズさんのお家に遊びに行ったのだ。ちょうどそのときに、ラトロブ大学に来ておられた千田先生にお会いした。こちらが次々と発する質問にあまり答えてくれなかった印象があるが、後で考えると、長田の好きなゴシップ話がほとんどで、そうしたゴシップにはとくに反応することはなかっただけなのかもしれない。

千田先生は本年度の授業で、ニコラス・エヴァンズと一緒に書いた論文“Mundari: The myth of a language without word classes”を取り上げてくれたそうだ。ほとんど日本では取り上げられることのない論文なので、大変感謝している。また、来年度は日文研で「日本語の起源はどのように論じられてきたか一言語学史の光と影」という題目で共同研究会をおこなう予定だが、それにも参加していただくことになっている。大野晋の時代には、日本語系統論あるいは日本語起源論は日本言語学の一大トピックだったが、今の時代には誰も関心を持たないテーマとなってしまう。まだ若かった千田先生が大野晋を囲んだシンポジウムに参加したように、この分野にも若い人が関心を抱いてくれることを願っている。千田先生への期待は記述研を引き継ぐだけではない。こうしたかつては大きなトピックだった分野にも取り組んでいただき、日本語学の将来を背負ってくれるのではないか。そう期待してやまない。千田先生の期待を表明して、この巻頭言を締めくくりにする。

記述研の益々の発展を心より祈り、ペンを置くことにする。